

【研究ノート】

大学生よさこいチームの全国実態と地域性

宮崎 恵・近藤暁夫

I はじめに

1. よさこい系イベントの興隆

日本では、前近代から各地で多種多様な歌舞が伝承されてきた。その基盤の上に、20世紀後半以降、伝統的な歌舞をもとにしながらも、広く観客に観せることを前提に催される、観光化されたイベントが広く行われるようになってきている。今日では、始めから観光客を対象としたイベントとして、伝統的な歌舞を組み込んだ祭りが企画されることも少なくない。

民謡・盆踊り等の伝統的な歌舞を活用して創始され、全国的な知名度を持ったイベントの代表例として、「よさこい祭り（よさこい節）」とその影響下で創始された「YOSAKOIソーラン祭り」、ならびにそれらから派生した「よさこい系イベント」が挙げられる。今日ではよさこい祭りに端を発する参加型・交流型の祭りは全国に広がり、「実数を正確に把握するのが難しいほど多様な形で、いろんな地域で、いろんなよさこいは踊られている」(川竹 2020:56)。なお、よさこい系イベントの確固たる定義はない(川竹 2020:56)^①が、ここではひとまず、1954年に開始された高知市の「よさこい祭り」と、その影響を受けて全国各地で開催されている、行政の主催・後援のもと、路上等公共の場で、公衆に向けて、多くはアマチュアの参加者がグループを組んで音楽に乗せた集団舞踏を披露するイベントを「よさこい系イベント」と総称したい。

よさこい系イベントの顕著な特徴には、その伝播速度の速さと伝播規模

の大きさがある。通常、民俗芸能としての祭り（祭祀）と歌舞は、その土地の歴史や文化と切り離すことが困難なもので、演者も基本的に村落共同体構成員に限られるなど社会的にも空間的にも閉鎖的性格をもつ。それゆえ、祭り相互の交流は希薄で、他地域に伝播する速度も一般に遅い。その中で、よさこい系イベントは顕著な速度で全国に伝播し、今日ブラジルをはじめ海外への伝播も報告されている（内田 2015）。

このような伝播の結果、よさこい系イベントは、イベント間や参加チーム間の交流も盛んな点が大きな特徴となる（川竹 2020:162）。名古屋の「にっぽんど真ん中祭り」のように、地理的に列島の中央部に位置する名古屋に全国から集まって踊ることをコンセプトにし、「地域性の開放」という特徴」（矢島 2015:14）を前面に押し出す事例も存在することは、これまでの多くの祭り（祭祀）になかった特徴といえる。

これらのよさこい系イベントは、マスメディアが頻繁に取り上げただけでなく学界からの注目も受け、多くの研究（例えば内田 1992、矢島 2015）が蓄積されてきた。これらの研究やイベント当事者の証言・記録、マスコミ報道等を通して、よさこい系イベントの誕生や系譜、全国への拡散プロセス、イベントの組織内容、経済効果を含む社会的文化的なイベントへの評価等は広く知られている。しかしながら、よさこい系イベントは全国に展開し参加者も膨大で多様であることから、十分な検討が及んでいない部分も少なくない。本稿は、これらのよさこい系イベントにおいて本格的な検討が少ない、イベントに参加する大学生チームとそこに所属する学生の動向に焦点を当て、先行研究の残した課題を克服しようとするものである。

2. よさこい系イベントと大学生

よさこい系イベントに対して、これまで地理学の立場から内田忠賢の一連の研究（内田 1992、1994、2009、2015、2019）が得られている。ただし、

これは主によさこいの「踊り子隊」と「競演場」に着目し、祭りの上演される空間や地域社会との関係の解明を主眼にした（矢島 2015:35）もので、全国の大学に散らばる大学生と大学生を主体とするよさこい系チームの具体的な分布や活動・交流の実態、ならびにそれらの地域的な特徴について十分論じているわけではない。他の地理学や民俗学等のよさこい系イベントを扱った先行研究（例えば矢島 2015）においても、大学生のよさこいチームに関する紹介・検討自体がないか、なされていたとしても個別チームや個人について紹介する程度に留まっている。しかしながら、よさこい系イベントは、以下に述べるように、その創始と全国への拡大、開催組織、交流活動等イベントの全体にわたって大学生の役割が非常に大きく（矢島 2015:74-75）、よさこい系イベントの特徴や伝播、社会的影響を考える上で、大学生の役割を無視することは難しい。

よさこい系イベントの元祖は、1954年に始まった高知市のよさこい祭りであるが、全国に伝播するきっかけとなったのは1992年に始まった札幌市のYOSAKOIソーラン祭りである。YOSAKOIソーラン祭りは現役の大学生が創った祭り（矢島 2015:1）であり、よさこい系イベントは当初から「大学生によるイベント」の性質を有していた。今日でも、YOSAKOIソーラン祭りや名古屋市のにっぽんど真ん中祭りは、大学生で組織される学生実行委員会によって運営が支えられている。また、踊り手として活動する大学生も多く、川竹（2020）は、全国で200～300の学生チームが存在するのではないかと推定し、「一つのチームに平均約70人の学生がいるとして、1万5千人から2万人の学生が毎年よさこいを踊っている計算」（川竹 2020:134）になると概算している。

しかしながら、川竹自身が、全国に「大学生のチームが増えた背景を明確に説明することは（中略）筆者には難しい（中略）仮説としては、よさこい系イベントが全国的に数を増やすなか、それぞれの地域で大学生のよ

よさこいサークルが徐々にでき、それが学生のなかで途切れることなく続いて拡大傾向にあるというものだが、より詳しく実態を調べる機会がほしい」(川竹 2020 : 135-136) と述べているように、実際にどの程度大学生のチームが全国に存在するのか、またそれらはどのような経緯で結成され、どのような規模で、毎年どのような活動をしているのかという基本的な実態も十分に把握されているとはいえない。よさこい系イベントの発祥の地である高知の大学(高知大学)で、「よさこい概論」という授業科目を教えている川竹が「より詳しく実態を調べる」必要があると述べている以上、よさこい系イベントに参加する大学生に関する全体像は現在のところ誰も正確にはわかっていないとみなすのが妥当であろう。

よさこい系イベントに参加する大学生の実態が十分把握できていない理由としては、実態調査や統計整備にかける予算と労力面での問題に加えて、よさこい系イベント自体の性格によるところが大きい。よさこい系イベントは、参加にあたっての自由度が極めて高く、参加者の属性も踊りの内容も多様性が大きい。また、比較的自由にチーム間・イベント間の交流や参加チームの変更もできる流動性の高さにも特徴がある。これらは、形式を重視し限られた集団内で伝承されるのが一般的であった日本の伝統的な祭祀(歌舞)と対比しての、よさこい系イベントの際立った特徴であり、全国に急速に広がっていく上での強みとなった(川竹 2020)。

そして、その流動的で自由な性質から、全国のよさこい系イベント全体を把握し統括するような機関や組織はない⁽²⁾。むしろ、正確なイベントの件数や参加者数を「正確に把握するのは難しいし、定義や把握の正確さを追求することにどれだけ意味があるのか」(川竹 2020 : 55) ともいわれている。仮に全国のよさこい系イベント全体を把握し統括するような組織をつくるとすれば、「元祖」たる高知が旗振り役となり、よさこい系イベントの有力な中心地である札幌や名古屋の組織の協力を得つつ、全国のよさ

こい系イベントを糾合する形をとることになろうが、そのことは全国のよさこい系イベントを、高知なり札幌なりを中心とした序列下に統合することにつながり、よさこい系イベントの強みである自由な横のつながり、交流、連帯を自ら突き崩すことになりかねない。

このように全体把握をとまなう統合を嫌う性質もあり、よさこい系イベントの実態については、代表的な研究者である内田も、全国でどの程度の踊り手がいるかという基本的情報の段階から、「一説には200万人」（内田2019）と伝聞で述べるに留めている。まして、地域社会に根差した一般の踊り手とは違い、数年で大学を離れる大学生の実態は、さらに断片的なことしか明らかにされていない。

3. 本研究の目的

全国規模の大規模な統計整備や実態把握が困難なのは、よさこい系イベントの性質と大学生という集団の特性からしてやむを得ない面はある。しかしながら、研究対象としてみるなら、やはり大学生に関する情報が極めて断片的であることは大きな障害である。正確な実態把握を通した、大学生のよさこい系イベントでの役割とその地域社会との関係等を解明することへの努力は、地道な形であってもなされ続けられる必要があろう。

例えば、大学生が関わる論点として、よさこい系のイベントは全国に伝播する中で多様に変化していったが、その過程における大学生の役割の検討が挙げられる。よさこいは、「正調」と呼ばれる高知のよさこい鳴子踊りから、楽曲も踊りも衣装も自由に変化していった。高知のよさこい祭りに参加するチームの演舞と札幌のYOSAKOIソーラン祭りに参加するチームの演舞には共通点もあるが、違いも生まれ、今日ではそれぞれの演舞やチームを「高知系」、「ソーラン系」と分けて呼ぶこともある。また、楽曲や踊りも衣装も、明らかによさこい祭りやYOSAKOIソーラン祭りの影

響を受けているものの、もはやこの両者のカテゴリーに組み込むことが困難な程度に独自の展開をなしたイベントもある。このようなよさこい系イベントの伝播と、その中で多様な変容プロセスにおいて、同一世代・同一階層に位置する親和性を持ち、また個々人が相対的に流動性と柔軟性に富み、時間的に長距離の遠征が可能で、実際にイベント間あるいは大学のよさこい系チーム同士で頻繁に交流している大学生の役割が大きかったことは十分想定されるものの、現状ではそれを解明することができない。

また、現在全国各地で行われているよさこい系イベントに参加する一般の踊り手たちのうち、高知や北海道のように踊り手組織が地域社会に根を下ろしているわけではない地域においては、相当分の踊り手たちが、大学生のときに大学のよさこい系サークルに参加して踊りの楽しさに目覚め、卒業後地域の踊り手となっていったというプロセスをたどったと考えられる。しかし、現状踊り手の養成機能からみた大学よさこい系チームの実態や、高校まで本格的な踊り手の経験がない若者が、大学でどのようなきっかけでよさこい系チームに参加しているのか、また卒業後もどの程度よさこい系イベントに関係し続けているのかも十分わからない。

そこで、本研究ではよさこい系イベントに参加する全国の大学生チームとそこに所属する大学生に焦点を当てて実態調査を行う。具体的に、本研究の目的として、大学生の実態を調べ明らかにしようとするのは、以下の点である。まず、全国で現在どの程度のよさこい系大学サークル・チームが存在し、どの程度の大学生がそこに所属しているのか。彼ら彼女らは、どのような契機でよさこい系チームに所属し、踊るようになったのか。どの大学のチームがどこのどのようなよさこい系イベントに参加しているのか。どこの大学のどのようなチームが、具体的にどのような演舞を行っているのか、またそこに何らかの地域的な特徴は見られるのか。全国の大学生ならびにチーム・サークル間にどのような交流があるのか。大学で踊っ

た彼ら彼女らは、卒業後もどのような形でよさこい系イベントや大学のよさこい系サークルと関係をもつのか。

4. 研究の方法

もちろん、よさこい系イベント自体が自由性の高さに特徴があり権力性を帯びかねない一元的な実態把握への抵抗がある上に、学生身分である大学生を対象に調査を行う場合は、なおさら調査にあたっての権力性に留意することが必要となる。例えば、仮にどこかのよさこい系イベントの実行委員会が、全国的な大学生へのアンケート調査を行う場合、調査を受ける側の大学生にとってはイベントへのエントリーを受け付け、時には排除も可能な側からの調査となり、協力への強いプレッシャーを感じざるをえない。また、学術目的の調査であっても、大学の教員やそれに準ずる立場の人間が主催する場合には、大学生にとっては、目上の存在からの依頼となる。いずれの場合も両者の間に非対称的な権力関係が出ることは避けがたい。調査対象となった学生側にはプレッシャーがかかり、回答に何らかのバイアスが生じることも考えなければならない。どのような調査でも、調査する側とされる側に何らかの権力関係が生じることは宿命的なことではあるが、本研究のような目的で調査を試みる上では、対象が学生身分にあることと、よさこい系イベント自体が上下関係や中心-周辺関係を極力除去した流動的な横の繋がりを重視するものであるという性質を最大限鑑みた配慮が必要であろう。

そこで、本研究においては、調査は「自身も大学のよさこい系チームに所属し、よさこい系イベントで踊ってきた大学生による卒業研究」の形で行う。このような調査であれば、調査する側とされる側は、同じ「大学のよさこい系チームに所属し、同じ踊りの場を共有してきた学生同士」となり、両者の間に上下関係や権力関係が生じることは最小限に留められよう。

ただし、大学生の卒業研究として調査を行う以上、その規模や精度については、研究時間の制約や学生自身の力量上、一定の限界が出ることも避けがたい。実際に、前節で述べた「研究目的」のうち、本稿では十分に解明・達成できない部分が少なくないことは予め白状せざるをえない。それでも、既往の調査・研究がほぼ皆無の状況においては、このような限定された調査であってもまず実施して世に問い、更なる成果の蓄積を促すことにも意義があろう。

具体的な研究方法としては、まずよさこい系イベントの参加チームリストやSNS上の情報から全国の大学生よさこいチームを抽出する。具体的なチームリストについては、「よさこい祭り」、「YOSAKOI ソーラン祭り」、「にっぽんど真ん中祭り」、「東京よさこい」、「原宿表参道元氣祭スーパーよさこい」、津まつり「安濃津よさこい」、「こいや祭り」の、新型コロナウイルス感染症蔓延前である2019年開催の参加チームリストを用いる。これらのイベントに参加していない大学生チームや、SNSアカウント等を有していない大学生チームについては当然把握できないことになるが、既往調査がほぼない現段階では、まずリスト化できる分を優先した。

次に、大学生よさこいチームの演舞を現地や動画サイト等で確認し、その衣装や音楽、演舞の特徴をもとにチームを分類する。そして、大学生チームの演舞作品、および参加するよさこい系イベントの類型と活動拠点との関連性をもとに、全国のよさこい系イベントと大学生チームの地域的な分布関係を明らかにする。

さらに、大学生よさこい系チームを対象に、チームの構成員や活動内容、演舞作品等に関するアンケート調査を実施し、大学のよさこい系サークル・チームならびにそこに参加する大学生の実態を明らかにしていく。

Ⅱ よさこい系イベントの全国展開と大学生の関わり

1. 高知市の「よさこい祭り」

本章では、大学生よさこいチームが参加する対象となる主なイベントの歴史と、大学生の役割について概略的に述べる。

高知市のよさこい祭りは、地域の戦後復興、商店街の活性化を目的として、1954（昭和29）年8月に始められた。きっかけは高知商工会議所の提言で、隣接する徳島県の阿波踊りを参考にして、毎年高知に活気をもたらす新しい祭りをつくることになった。その中で高知の日本舞踊5流派や作曲家の武政英策の協力を得て、従来から高知にあったよさこい節を活用し、よさこい鳴子踊りを考案した。これがいわゆる「正調」である。最初のよさこい祭りの踊りは両手に持った鳴子を鳴らしながら、正調に合わせて前進するだけであったが、1970年代後半からは踊りや楽曲などがアレンジされるようになった。

発祥から約40年間、参加団体や踊り子数は増加し、高知県外からの参加もあって、よさこい鳴子踊りは広がっていったものの、県外にイベントが広まることはなかった。しかし、1992年に北海道札幌市で第1回YOSAKOIソーラン祭りが開催されたことを皮切りに、全国によさこい系イベントが広がっていくこととなる。

2. 札幌市の「YOSAKOIソーラン祭り」

YOSAKOIソーラン祭りの発起人となったのは、当時北海道大学の学生であった長谷川岳（現・参院議員）である。長谷川自身は高知との縁はなかったが、母親が長期入院中の高知でたまたまよさこい祭りをみて、同年代の若者が生き生きと踊っている姿を目にしたことから、札幌でも若い人がお金を支払ってでも参加したいと思える祭りを始めたいと考えた。そして、長谷川を中心にした数名の学生による企画と、長谷川らの呼びかけに

応じた約 130 人の学生スタッフを中心に、高知県北海道事務所や北海道高知県人会の関係者や地元企業等を巻き込みながら、1992（平成 4）年 6 月に YOSAKOI ソーラン祭りが開始された（森 1999）。はじめは大学生中心のイベントで参加チームも 10 程度であったが、10 回目の開催となる 2001（平成 13）年には 408 チームが参加し、発祥の地である高知のよさこい祭りの倍以上の規模となった（川竹 2020：30）。

YOSAKOI ソーラン祭りでは、よさこい祭りのルールを参考にしたものの、踊りを披露する場合は街路よりもステージでの競演を重視し、踊りの最初から最後まで鳴子を持つ必要はなく、楽曲のすべてまたは一部にソーラン節を含めるなど独自のルールが設定された。こうして、よさこい系イベントは、高知から札幌に派生した全国伝播の最初の段階において、同じよさこい発祥の歌舞をベースとしながらも地域によって演舞の特徴に違いが生まれ、これが全国各地で多様な「よさこい系」の踊り・イベントを発生させる素地になった。

YOSAKOI ソーラン祭りは、イベントとして非常な成功をおさめ、地域活性化の事例としてメディアを通じて全国に紹介された。川竹が長谷川の言として紹介することによれば、YOSAKOI ソーラン祭りが拡大していく過程では、「地方で就職している学生実行委員会 OB・OG に地域の人々を紹介してもらおう」ことや、大学生を中心とした踊りを実際に各地の関係者に披露するキャラバンを粘り強く行ったことが大きかったという（川竹 2020：32-33）。

3. 名古屋市の「にっぽんど真ん中祭り」

北海道の成功に刺激を受け、1990 年代後半には全国各地でよさこい系イベントが開催されるようになった。その代表が、1999 年に名古屋市で開始され、2016 年にイベントとして全国集客数ランキング第 5 位⁽³⁾となっ

た、にっぽんど真ん中祭りである。にっぽんど真ん中祭りの発起人は、YOSAKOI ソーラン祭りに参加していた名古屋を中心とした大学生チームのメンバーであった水野孝一（現・公益財団法人にっぽんど真ん中祭り文化財団専務理事兼総括プロデューサー）である。にっぽんど真ん中祭りは水野が在籍していた中京大学の学生らが中心となって呼びかけ、祭りを支える仕組みを YOSAKOI ソーラン祭りに学びながら、観客動員ゼロ＝全員参加型の祭りを目指して創始された。開始当初は 26 チームの参加であったところから、2007（平成 19）年には 200 チームが参加するまでに規模が拡大した（川竹 2020：137）。ルールは高知のよさこい祭りや札幌の YOSAKOI ソーラン祭りに類似しているが鳴子を義務づけず、また楽曲の中に地元民謡のフレーズを入れることが設定された。よさこい鳴子踊りやソーラン節に限定しない地元の民謡を取り入れることにしたことで、よりチームのオリジナリティを追求できるようになった。また、ルールの影響か、鳴子を持たないチームも多い。また、この祭りには、「全国学生 No1 決定 キャンパスバトル」として、参加する大学生チームを対象に、会場の観客からの拍手の音量で競う審査方式を取り入れ、学生チーム No1 を決めるようなイベント（川竹 2020：131）を組み込んでおり、学生の祭典としての色彩が強い。

ここまで記した 3 つの祭りは全国的な知名度を持つよさこい系イベントであるが、この他にも大学生が創始者となったイベントは全国各地にある。例えば、仙台市の「みちのく YOSAKOI まつり」は、宮城県出身の三宅浩司が進学した高知大学の大学祭の鳴子踊りを故郷の宮城に取り入れて 1998 年から始めたものである（矢島 2015：66）。既往の祭り（津まつり）にイベントを加える形で津市の青年会議所を中心に始められた「安濃津よさこい」も、立ち上げ支援に YOSAKOI ソーラン祭り創始者の長谷川岳が（大学は卒業後だったが）関わっている（川竹 2020：47）。

4. よさこい系イベントと大学生

このように、全国のよさこい系イベントは、大学生が中心となって創始したものが多く、また祭りを創るほどではなくても学生チームを結成して各種の祭りやイベントに参加する事例も多い（矢島 2015：74-75）。長谷川岳ら中心的な大学生の役割の大きさはもちろんだが、彼らを支え、ともに踊った無数の大学生の存在があっはじめて、よさこい系イベントは定着・継続し、全国に拡大していったといえる。今日も、多くのよさこい系イベントが学生実行委員会を中心に運営されており、参加チームの相当部分を大学生のチームが占めている。

学生実行委員会の具体的な活動として、YOSAKOI ソーラン祭りでは、YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会が今日でも企画から当日の進行まで関わっている。企業・団体や個人に協賛を依頼する段階においても、学生実行委員会全員で担当分けを行い、2人1組になって200社は陳情に回るという（川竹 2020：137）。

につぼんど真ん中祭りでは、毎年名古屋周辺の大学の学園祭実行委員会メンバーへの勧誘や、4月の新歓の時期にキャンパス内でのにつぼんど真ん中祭りへの勧誘活動を通してメンバーを集め、学生実行委員会が組織される。につぼんど真ん中祭り学生実行委員会も祭りの企画に携わり、祭り当日には進行などを任される。また、札幌、名古屋、そして、津まつり「安濃津よさこい」が開催される三重の学生たちは、お互いの祭りがあるときにはそれぞれ応援に駆けつけている⁽⁴⁾。

さらに、につぼんど真ん中祭りでは、祭りに参加する大学生チームに対して意見を聞く等の学生間の交流も行っている。毎年2月には「どまつり合宿」としてチームのスキルアップ、交流、祭りの企画・ルール作りを目的とした400人が参加する1泊2日の研修合宿を行っている。この場で出た意見については、参加要項を作る際に反映させている⁽⁵⁾。

Ⅲ 調査結果と考察

1. 検討の対象となる大学生チーム

第I章で述べたように、よさこい祭り、YOSAKOIソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、東京よさこい、原宿表参道元氣祭スーパーよさこい、津まつり「安濃津よさこい」、こいや祭りの2019年開催の参加チームリストや、その他SNS上の情報から現在活動している大学生チームを抽出した。調査対象とする基準を、大学生のみのチーム、または大学生主体で活動しているチーム（過去に活動があっても現在までに解散したチーム、大学生が主体であるか不明のチームは除く）とした結果、全国142の大学生よさこいチームが抽出された。

これら142チームを対象に、2021年段階で実際に演舞している作品を現地確認もしくはSNSや動画サイト等で公開されている動画をもとに確認し、演舞形式別に分類を行った。さらに、抽出された142チームから、連絡手段を確認できなかった27チームを除いた115チームにアンケートを配布（電子メール等で依頼文を送信し、Web上で構築したフォームに回答してもらう形で実施した）し、チーム幹部以上の1名に回答をもらった。アンケート調査は2021年の10月～11月に行い、38件の回答を得た（有効回答率33%）。アンケートでは、「アンケート回答者について」、「チームについて」、「演舞作品について」、「参加するよさこい系イベントについて」の4項目、23個の設問を設けた（第1表）。

2. 大学生チームの演舞作品からみた地域性

(1) チームの分類基準

前節で抽出された全国142チームは、いずれも独自の演舞を行っている。演舞作品はチームごとに個性があるのは当然であるが、よさこい系イベントのルールに違いがあることから、チームが参加しているイベントに対応

第1表 アンケート設問項目一覧

項目	設問内容
アンケート回答者の属性	<ul style="list-style-type: none"> ・回答者の性別 ・回答者の学年（回答者が大学生でない場合は年齢） ・回答者の学生チーム内での役職等
大学生チームの概要	<ul style="list-style-type: none"> ・学生チーム名 ・メンバーの人数 ・メンバーの男女比 ・チーム構成員の大学生割合 ・チームの活動拠点 ・チームの創立年 ・他の学生チームとのチーム同士の交流の有無 ・前項で「ある」と答えた場合の具体的な内容
演舞の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・最新の演舞作品名（未公開の作品は除く） ・最新の作品の題材（着想を得たものやモチーフとなったもの） ・最新の作品のテーマ（作品に込めた思いや作品を通して伝えたい思い） ・これまでの作品づくりにおいて、題材とテーマどちらを先に決めるのか ・これまでの作品の題材に、活動拠点地域の名物や名所を取り入れているか ・作品づくりを外部の専門業者（楽曲・振付・衣装・題材等）に委託しているか ・演舞に用いる小道具 ・演舞に用いる大道具 ・振りのパートの種類 ・振りのパートが複数ある場合の、各パートの名称
よさこい系イベントへの参加	<ul style="list-style-type: none"> ・チームとしてこれまで参加したことのあるよさこい系イベント名 ・チームが最も活動の中心としているよさこい系イベント名

して一定の類型が確認できる。そこで、本研究では、主なよさこい系イベントである高知のよさこい祭り、札幌のYOSAKOIソーラン祭り、名古屋のにつぼんど真ん中祭りのルールをもとに、各チームの演舞を3つの類型に分けた。具体的な判断基準は、「鳴子」、「隊列型」と「隊形型」、「民謡」の3点である。

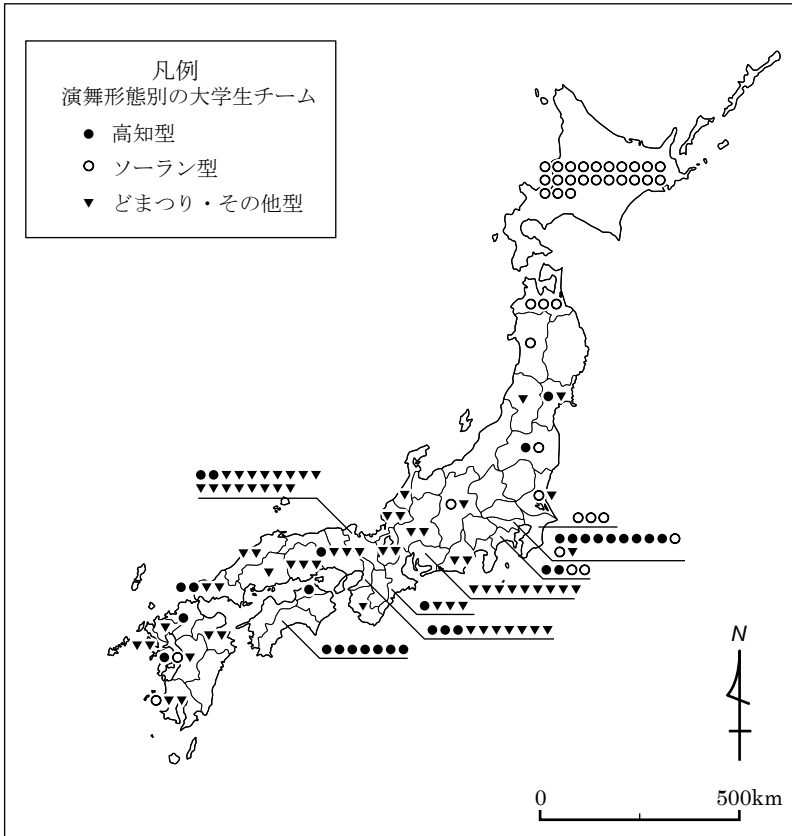
鳴子は、演舞を観察しその使用の有無を判断する。隊列型と隊形型は、演舞の実演や動画を確認し、その行われている「舞台」によって分類する。

パレード形式を重視した演舞である「隊列型」は、列をなしたまま踊りを継続しつつ、前進できる演舞とする。これに対して、ステージ形式を重視した演舞である「隊形型」は、隊列を一定の形態に固定せず、踊りを継続できない移動がある演舞とする。両方の性質を持つ演舞を行っている場合には、パレード形式とステージ形式のどちらが重視されているかを観察により判断する。民謡については、演舞で用いている音楽から、よさこい鳴子踊り、ソーラン節、それ以外の3つにあてはめて判断する。

以上の判断基準から分類した3類型を、「高知型」、「ソーラン型」、「どまつり⁽⁶⁾・その他型」と呼ぶことにする。高知型は、主に高知のよさこい祭りにみられる演舞の形式である。高知型の条件は鳴子を持っていて、隊列型であり、よさこい鳴子踊りの楽曲が曲中に入っていることである。これに分類された大学生チームは、32チームであった。ソーラン型は、主に札幌のYOSAKOIソーラン祭りにみられる演舞である。ソーラン型の条件は鳴子を持っていて、隊列型または隊形型であり、ソーラン節が曲中に入っていることである。これに分類された大学生チームは、39チームであった。どまつり・その他型は、高知型にもソーラン型にもあてはまらない演舞である。名古屋のにつぼんど真ん中祭りのルールが、高知のよさこい祭りと札幌のYOSAKOIソーラン祭りに比べて細かく設定されておらず、演舞作品が多様であることから、この祭りに参加するチームに典型的であるが、につぼんど真ん中祭りに参加しないチームであってもこの類型に分類される大学生のチームは多い。合計で71の大学生チームがこの類型に分類された。

(2) 全体の分布傾向

これら演舞の内容から3分類された全国の大学生よさこいチームを、活動拠点とする都道府県別にまとめた(第1図)。大学生よさこいチームは、全国34の都道府県で確認できる。大学全体の分布傾向の規定を受けて空



第1図 演舞形態別の大学生よさこいチームの全国分布

・各チームの演舞観察ならびに公開されている演舞動画より作成。

白の県もあるものの、ほぼ全国に広がっているといってよい。ただし、首都圏に位置し大学総数が多い（28校）埼玉県、よさこい系イベント発祥の地である高知県の隣接県（愛媛県・徳島県）に大学生チームが確認されないことは注目される。チーム数は、北海道（23件）、京都府（18件）、東京都（12件）、大阪府（10件）、愛知県（9件）、高知県（7件）の順に多く、三大都市圏と有力なよさこい系イベントの開催地に集まっている。大学の

全体数の分布と比べると、相対的に西日本にチームが多い傾向がみられる。

(3) 高知型

高知型の類型に含まれるチームは、東京都(9件)、高知県(7件)、大阪府(3件)の順に多い。東北地方に飛び地的な分布も見られるが、概ね高知県の属する四国地方と、隣接する地方(近畿・中国・九州)、東京・神奈川に分布が限られる。西日本のチームの分布は、恒常的に高知のよさこい祭りに参加できる圏域に対応していると考えてよいが、実際によさこい祭りに参加しているチームは32チーム中15チームと、次にあげるソーラン型チームのYOSAKOIソーラン祭りへの参加率を大幅に下回ることから、高知の祭りへの参加の有無を超えたよさこい祭り文化圏的な分布を想定することも可能であろう。東京都ならびに神奈川県の高知の飛び地的なチームの集中は、高知県人会が組織されている大学が存在することや、当地で開催されているよさこい系イベントが高知に近いルールであることが要因だと考えられる。東京都で開催されるよさこい系イベントのルールは、鳴子を持つこと、踊りながら前進すること、イベントによってはよさこい鳴子踊りの楽曲を曲中に入れることが設定されているなど、高知のルールに近い。実際に、東京の大学生チームは、高知のよさこい祭りに4チームが直接参加しているほか、高知系のルールで開催されている東京都内のよさこい系イベントに頻繁に参加していることが、今回のアンケート調査からも確認できた。

(4) ソーラン型

ソーラン型のチームは、北海道に突出して多く(23件)、北東北まではすべての大学生チームがソーラン型の演舞を採用している。鹿児島県に飛び地的な分布が見られるが、概ねソーラン型の演舞が見られるのは北海道・東北・関東地方に限られ、北海道を中心とした凝集的な分布傾向がある。ソーラン型に分類された39チームの中で、30チームが札幌のYOSAKOIソーラン祭りに参加している。このように、両者が混在する東京と神奈川

を除けば、概ね東日本のソーラン型、西日本の高知型と、棲み分け的な分布を確認することができる。

(5) どまつり・その他型

どまつり・その他型の大学生チームは、数量的には3類型の中で最も多く、高知型とソーラン型の分布の空白を埋めるように、中部地方や関西地方に広く分布している。特に、京都府（16件）、愛知県（9件）、大阪府（7件）が目立つ。このうち愛知県は、にっぽんど真ん中祭りが開催される名古屋市を擁していることによる分布とみなすことができるが、京都と大阪、特に京都の多さは特筆される特徴である。

京都には、「京炎そでふれ！」という学生による独自の創作歌舞があり、京都のよさこい系学生チームのうち14チームはチーム名に「京炎そでふれ！」の語を入れている。京炎そでふれ！は、2003年から毎年10月に京都市で開催されている学生プロデュースイベントの「京都学生祭典」で上演される創作おどりで、京都らしい曲、振り、衣装をもとに、四竹という沖繩発祥の民族楽器を手を持って踊る。名称からして「京」という地名と「振袖」という京都の舞妓による歌舞を意識している点、京都らしい曲や振り付けを主眼⁽⁷⁾に上演される点から、すでに高知のよさこい節の面影を見出すことが難しい。しかし、京炎そでふれ！のチームは、7チームがにっぽんど真ん中祭り、1チームがYOSAKOIソーラン祭りに参加が確認され、アンケート調査でも「神戸よさこい」や「龍馬よさこい」、「さくらよさこい」に参加したとの回答が得られるなど、学生側は自分たちがよさこい系の歌舞チームであることを認識している。京炎そでふれ！は、よさこい系の歌舞イベントが全国に伝播していく中で、京都で培われていた独自の歌舞文化・学生文化と出会い、変容・定着していった一変容形態と考えるのが妥当であろう。

京炎そでふれ！に類似した事例として、岡山県の「うらじゃ」が挙げら

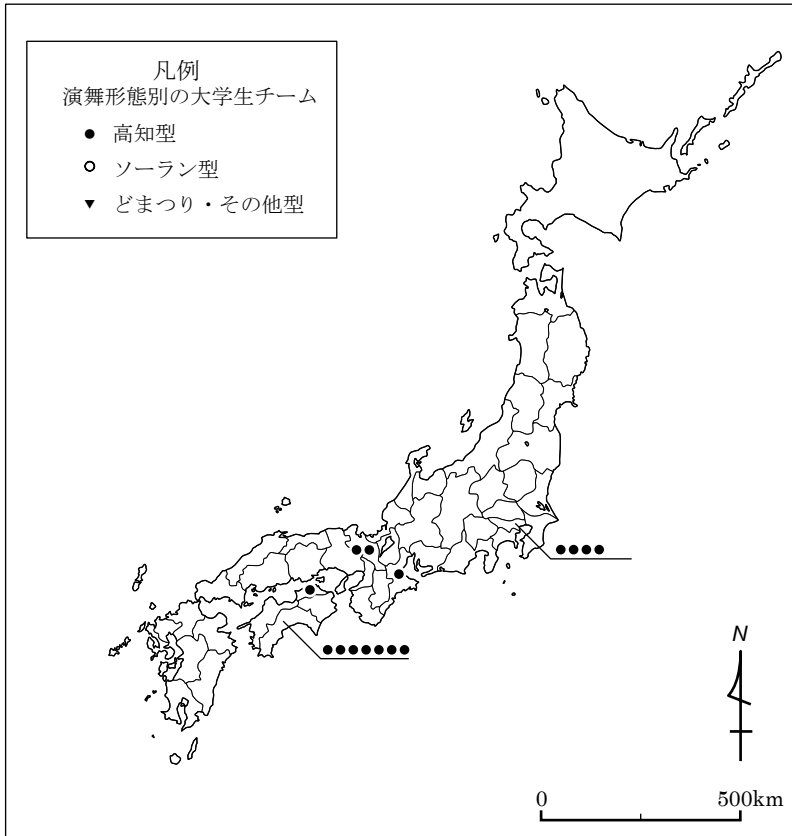
れる。うらじゃとは、桃太郎（吉備津彦命）と鬼神（温羅）の戦いを描いた伝説をもととして、まちづくり、ひとづくり、幸せづくりのきっかけになるようにと、1994年に岡山県岡山市で始まった踊りを軸として開催される祭りである。総踊りや温羅化粧が大きな特徴であり、よさこい節と直接の関係はない。しかし、うらじゃのチームも京炎そでふれ！と同様によさこい系の祭りに参加して歌舞を披露しており、よさこい系の歌舞チームとしての自己認識を持っている⁽⁸⁾。また、どまつり・その他型の大学生チームが7件存在する大阪府においても、7チーム中3チームにはチーム名に「よさこい」「YOSAKOI ソーラン」が入っており、演じている歌舞自体は高知型でもソーラン型でもないにも関わらず、よさこい系歌舞サークルとしてのアイデンティティを持ち続けていることは明白であろう。

全国によさこい系イベントが展開していく中で、全国各地に学生のよさこい系歌舞チームが生まれていった。それらは、今日もなおよさこい系歌舞サークルという自己認識を持ちながら、その過半数が従来の歌舞、すなわち「高知型」にも「ソーラン型」にも分類できない歌舞を演じているといえる。

(6) よさこい系イベントへの参加状況

代表的なよさこい系イベントである高知のよさこい祭り、札幌のYOSAKOI ソーラン祭り、名古屋のにつぼんど真ん中祭りにそれぞれ参加している学生チームの分布と彼らが演じている歌舞の類型を示したのが第2図・第3図・第4図である。

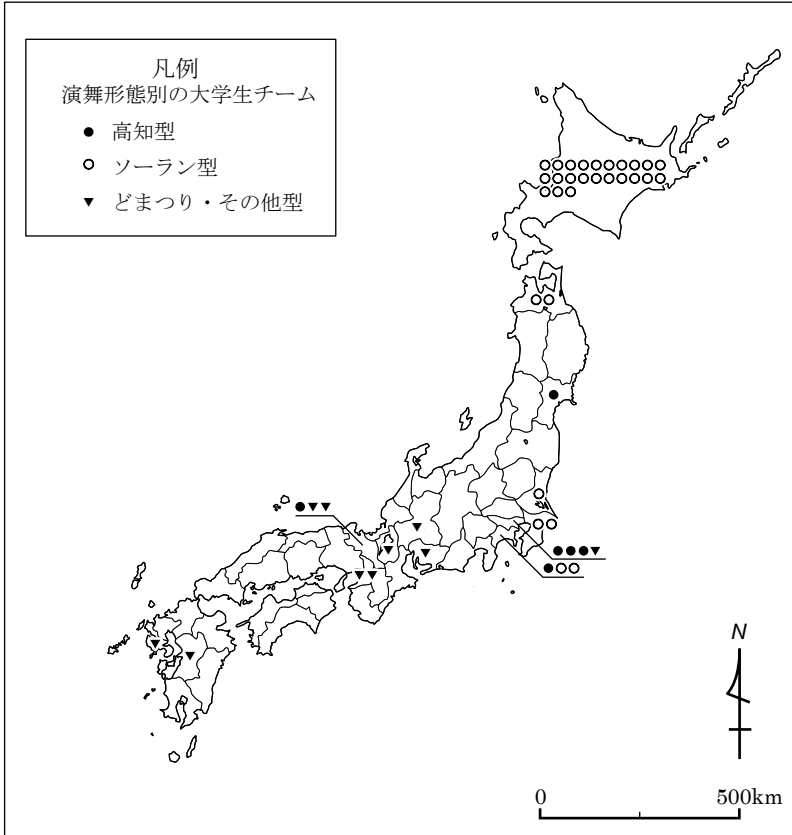
高知のよさこい祭りに参加している学生チームは15件で、すべてが高知型の歌舞を採用している。分布は、高知県が7件、東京都が4件、京都府が2件、三重県と香川県が1件と、飛び地的な東京都を除けば高知県のローカルイベントと言っても差し支えないよう状況となっている。むしろ、全国で142の大学生よさこい系チームが存在しているにも関わらず、本家



第2図 高知よさこい祭りに参加している大学生チームの分布
・2019年のよさこい祭り参加チームリストより作成。演舞類型は2021年現在。

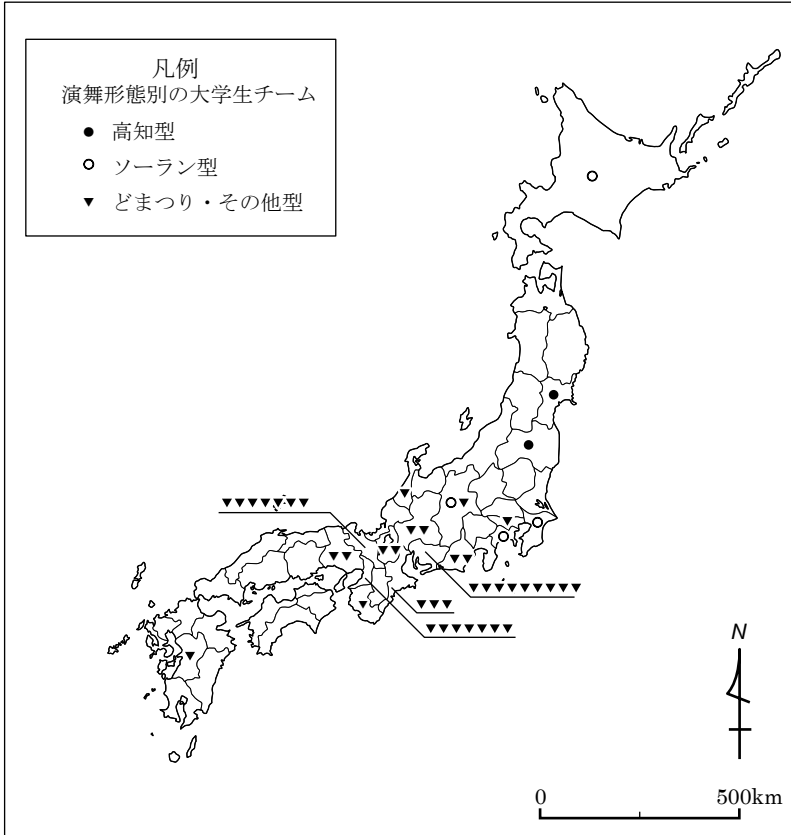
といえる高知のよさこい祭りに参加するのがその1割程度という事実自体に、よさこい系イベントの全国的な広がりや定着の深さを感じるべきかもしれない。

札幌のYOSAKOIソーラン祭りに参加している学生チームは46件で、30件がソーラン型、6件が高知型、10件がどまつり・その他型に分類される⁹⁾。大学生中心のイベントとして始まった経緯から、参加する学生チー



第3図 YOSAKOI ソーラン祭りに参加している大学生チームの分布
・2019年の参加チームリストより作成。演舞類型は2021年現在。

ムが多く、また北海道からの参加が極めて多い（23件）のが特徴である。三大都市圏を中心に、全国14の都道府県から大学生チームの参加が確認できるが、中部以西から参加するチームは普段はソーラン型の演舞を踊っていない。北海道以外から参加する場合には、航空機での往復と複数日の宿泊がほぼ必須であることを考えると、列島の北端部で行われるイベントとしては非常な吸引力と広い参加圏を有しているといえる。



第4図 につぼんど真ん中祭りに参加している大学生チームの分布
・2019年の参加チームリストより作成。演舞類型は2021年現在。

名古屋のにつぼんど真ん中祭りには、45の大学生チームが参加している。披露する演舞は最も多様性に富み、高知型2件、ソーラン型4件、どまつり・その他型39件である。日本列島の中央部に位置する名古屋に日本各地どこからでも集まって踊るという祭りのコンセプトであるが、東京以東や近畿以西からの学生チームの参加は少ない。それでも、中部・近畿を中心に13の都府県から学生チームを集めており、参加圏としてはよさこい祭りを

上回り、YOSAKOI ソーラン祭りに匹敵する。矢島は、にっぽんど真ん中祭りの参加圏は東海3県（愛知・岐阜・三重）が中心となる（矢島 2015：73）と述べているが、学生チームに限ればより広い範囲から参加者を集めている。

よさこい祭り、YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭りのうち、3つすべての祭りに2019年単年で参加が確認できた学生チームはなかった。2つの祭りに参加しているチームも15件（よさこい祭りとYOSAKOI ソーラン祭り両方に参加しているチーム2、YOSAKOI ソーラン祭りとにっぽんど真ん中祭り両方に参加しているチーム13）と、学生チーム全体の1割程度にとどまる。よさこい系イベントには全国規模での交流型イベントとしての性質があることは上述したが、現実には得意とする演舞と祭りの適合性や複数の祭りに参加する負担等から、チーム全体で複数の祭りに遠征することは難しいようである。それでも、熊本県で活動するチーム（肥後真狗舞）が札幌のYOSAKOI ソーラン祭りと名古屋のにっぽんど真ん中祭りの両方に参加し、東京（早稲田大学“踊り侍”）や京都（京都チーム「櫻嵐洛」）の学生チームが高知のよさこい祭りと札幌のYOSAKOI ソーラン祭りの両方に参加するような。列島をまたにかけた活動を行っている例があることは、日本の大学生の広範な交流活動の事例として、過小評価するべきではないだろう。

3. アンケート調査の結果と考察

(1) アンケート調査結果の概要

アンケート調査で回答を得た38の大学生チームの一覧を第2表に記す。いくつかのチームを除けば大学生の構成員割合はほぼ100%で、10人以下（2件）から100人以上（5件）までチーム規模の差も大きい。平均すると1チーム55人程度の学生が所属している。この55人という数値を本研究

で抽出された全国142チームに機械的に当てはめると、2021年現在日本の大学生よさこいチームに所属している学生の数は約8千人と計算される。もとよりこれは乱暴な推計であること、新型コロナウイルス感染症流行下という特殊な一年度の調査であること、すべての大学生チームを網羅できているとはいえないこと、地域のチームで活動している大学生を考慮に入れていないことなどを加味すると、実際によさこい系の演舞チームで活動している大学生の数はさらに多いと考えられる。川竹の、「大学でいえば大学名が入るチームは100を超えて200チームぐらい、大学名が入らないチームを含めた学生チームでいえば200から300チームはあるのではないかと推定（中略）一つのチームに平均約70人の学生がいるとして、1万5千人から2万人の学生が毎年よさこいを踊っている計算」（川竹2020：134）という推定はやや過大かと思えるが、本アンケートの結果のみから否定するまでは至るまい。

男女比ではほとんどのチームで女子学生の方が多いとの回答が得られており、男子学生が多数を占めるチームは北海道と滋賀県の2チームしかない。全体的な男女比率は男3：女7である。従来の研究でも、「全国的にみれば、参加者として、女性が圧倒的に多い」（内田2010：41）、「YOSAKOIソーラン祭りの参加者の実に7割が女性」（森1999）とよさこい系イベントの参加者に占める女性の多さは指摘されているが、本アンケートはそれを裏付けている。

アンケート調査結果からみる大学生よさこい系チームの創立年は、多くが2001年～2010年である。最も早いのは1997年に創立された北海道のチームで、20世紀中に創立されたのは3チームと回答の1割に満たない。YOSAKOIソーラン祭りの創立が1992年、にっぽんど真ん中祭りの創立が1999年であることを鑑みると、ほとんどの大学生よさこいチームは、これらの祭りの成功を受けて全国によさこい系イベントが定着していった

ことを受けて、常設の大学生サークル・チームとして創立され、毎年各地の祭りに参加しながら存続してきたものとみなすことができる。大学のサークル活動の一環としてよさこい系の演舞とそれを組織的に先輩から後輩に受け継いでいくサークル・チームが定着していったのは2000年代から2010年代と考えることができ、これは川竹の「よさこいの全国への普及が一定の落ち着きを見せてきた時期に顕著になってきたことに、大学生チームの増加が挙げられる」（川竹 2020：131）という指摘を裏付ける結果である。また、大学生チームの演舞形態には高知型が少なく、ソーラン型やどまつり・その他型が多いのも、多くの大学生チームがYOSAKOIソーラン祭りやにっぽんど真ん中祭り等全国に派生した祭りの影響を受けて創始されたと考えれば妥当なことであろう。

(2) 演舞のモチーフと地域性

アンケートでは、2021年に披露している演舞の内容・モチーフにチームが所属する地域の名物や名所が組み込まれているかを問う設問に、過半数の22件が「ある」と回答した。具体的な演舞内容では、「奥会津霧幻峡」（福島県のチーム）、「三保の松原」（静岡県チーム）、「長良川花火大会」（岐阜県チーム）、「名古屋駅前のモニュメント」（愛知県チーム）、「伊勢歌舞伎」（三重県チーム）、「石田三成」（滋賀県チーム）、「源氏物語」（京都府チーム）、「鞍馬天狗」（京都府チーム）のように、地元地域の名勝やゆかりの人物・物語作品がモチーフに取り上げられていた。また、「善光寺」（長野県チーム）、「大宮五十鈴神社の例祭」（長野県チーム）、「祇園祭」（京都府チーム）のように本来なら他宗派他地域の祭礼で上演することが憚られるような宗教施設や宗教行事を前面に出すチームもあり、これも日本の伝統的な祭祀から生じつつもそこから離れた自由度を獲得した、よさこい系イベントならではのものといえよう。なお、よさこい系イベントの演舞で必要となる音楽や衣装をすべて大学生が自ら製作するのは

第2表 アンケート回答一覧

No	活動拠点	創元年	チーム人数	大学生の割合	男女比	他チームとの交流	演舞の地域モチーフ
1	北海道	2008年	41～50人	40%	3：7	なし	○
2	北海道	2008年	21～30人	90%	4：6	あり	○
3	北海道	1997年	11～20人		7：3	あり	○
4	北海道	2007年	21～30人		2：8	あり	×
5	北海道	1999年	11～20人		5：5	あり	×
6	北海道	2014年	91～100人		5：5	あり	×
7	青森県	2005年	51～60人		3：7	あり	○
8	福島県	2003年	51～60人		4：6	あり	○
9	茨城県	2005年	11～20人		0：10	なし	×
10	茨城県	2008年	81～90人	80%	4：6	なし	○
11	東京都	2010年	91～100人		1：9	あり	×
12	神奈川県	2006年	61～70人		3：7	あり	○
13	東京都	2003年	31～40人		1：9	なし	○
14	東京都	2018年	51～60人	90%	1：9	なし	×
15	東京都	2005年	101人以上		3：7	あり	×
16	東京都	2002年	101人以上		3：7	あり	×
17	長野県	2001年	51～60人		4：6	なし	○
18	長野県	2009年	11～20人		1：9	なし	○
19	岐阜県	2011年	91～100人		3：7	あり	○
20	静岡県	2004年	31～40人	90%	1：9	なし	○
21	愛知県	2004年	31～40人		3：7	なし	○
22	愛知県	2001年	61～70人		3：7	あり	○
23	三重県	2001年	21～30人		0：10	なし	×
24	三重県	2002年	21～30人		3：7	なし	○
25	滋賀県	2009年	21～30人		6：4	あり	○
26	京都府	2005年	51～60人		1：9	あり	○
27	京都府	2011年	101人以上	90%	2：8	あり	○
28	京都府	2004年	61～70人		1：9	あり	○
29	大阪府	2006年	41～50人		1：9	あり	○
30	大阪府	2002年	11～20人		2：8	なし	×
31	大阪府	2001年	101人以上		3：7	あり	○
32	大阪府	2009年	10人以下		5：5	なし	×
33	岡山県	2002年	61～70人		2：8	あり	○
34	山口県	2000年	21～30人	90%	0：10	あり	×
35	香川県	2013年	101人以上		3：7	あり	×
36	長崎県	2003年	10人以下		0：10	なし	×
37	長崎県	2003年	71～80人		4：6	あり	×
38	大分県	2015年	81～90人		4：6	あり	×

※「大学生の割合」は「100%」以外の回答のみ記載。

・アンケート調査より作成。

2021年の演舞の題材	参加経験のあるよさこい系イベント
	YOSAKOI ソーラン祭り YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、みちのく YOSAKOI まつり、かみどん祭 YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り YOSAKOI ソーラン祭り、旭川神どんまつり、YOSAKOI ソーラン祭り道南大会
大花火	YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り YOSAKOI ソーラン祭り
鼓動	YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、みちのく YOSAKOI まつり
奥会津 霧幻峡	にっぽんど真ん中祭り、みちのく YOSAKOI まつり、うつくしま YOSAKOI 祭り、ほか3 茨城どまんなかよさこいまつり
ウミサチヤマサチ伝説	YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、みちのく YOSAKOI まつり
夜明けの太陽	よさこい祭り、原宿表参道元氣祭スーパーよさこい、縄文宮戸祭り、ほか10
百鬼夜行	YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、原宿表参道元氣祭スーパーよさこい YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、原宿表参道元氣祭、ほか6
あやつなぎ (紐の結び方)	原宿表参道元氣祭スーパーよさこい、東京よさこい、瑞浪バサカカーニバル、ほか3 原宿表参道元氣祭スーパーよさこい
現代人	よさこい祭り、YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、原宿表参道元氣祭
善光寺	にっぽんど真ん中祭り、みちのく YOSAKOI まつり、犬山踊芸祭
大宮五十鈴神社の例祭	にっぽんど真ん中祭り
長良川花火大会	にっぽんど真ん中祭り
三保の松原 天女伝説	にっぽんど真ん中祭り
金木犀	にっぽんど真ん中祭り、浜松がんこ祭、犬山踊芸祭、わいわい若宮、ほか2
名駅前モニュメント「飛翔」祭り	にっぽんど真ん中祭り、犬山踊芸祭、四日市よさこい、浜松がんこ祭 にっぽんど真ん中祭り、安濃津よさこい、こいや祭り、犬山踊芸祭、ほか3
伊勢歌舞伎	よさこい祭り、にっぽんど真ん中祭り、安濃津よさこい
石田三成	にっぽんど真ん中祭り、こいやまつり、sailing 神戸、さくらよさこい、ほか2
源氏物語	おの恋おどり、神戸よさこい、京都学生祭典、龍馬よさこい、さくらよさこい
祇園祭	にっぽんど真ん中祭り、おの恋踊り、カエル祭り、こいや祭り、ほか6
鞍馬天狗	YOSAKOI ソーラン祭り
大阪ヤンキー	にっぽんど真ん中祭り にっぽんど真ん中祭り
町火消し	YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り -
	よさこい祭り、銭形よさこい、岡山桃太郎まつり、婆娑羅まつり、ほか5
虹、光の三原色、白色	にっぽんど真ん中祭り、YOSAKOI させば祭り
一陽来復 (四字熟語)	よさこい祭り、観音寺銭形よさこい、婆娑羅祭り、神戸よさこい、こいや祭り、ほか4
	YOSAKOI させば祭り、川棚かつちえて祭り、火の国 YOSAKOI まつり、ほか2
	YOSAKOI ソーラン祭り、にっぽんど真ん中祭り、YOSAKOI させば祭り
	YOSAKOI させば祭り

困難だが、振付等、衣装と楽曲以外の部分は概ねチーム内で用意している。

矢島は、よさこい系祭りの特徴に「参加集団にみられる地域表層の多様性」の存在を挙げ、「参加集団は使用する民謡だけでなく、地元の名物や名産、有名人などを踊りや曲（歌詞）に表している」（矢島 2015：97）と指摘している。同時に、よさこい系祭りの「参加集団（チーム）も他のチームとの差異化を求める。その際に多く利用されるのが地域性の表出である」（矢島 2015：247）と、チームの個性を際立たせる上での地域的なモチーフの有効性を指摘する。もとより、「京炎そでふれ！」のように、大学生のよさこい系チームは、その名称にも地域的な語句を用いる例が多い。例えば、静岡県ของทีม名には名産の「お茶」、浜松特産の「鰻」が含まれている。ほとんどのチーム名についている大学名も多分に地名由来の語句であることを加味すると、よさこい系の大学生演舞チームは、所属大学名、チーム名、演舞内容の3段階で地域性を表出しているといえる。そして、これらの地域性を背負った大学生たちが全国各地のよさこい系イベントに参加して交流を行っていることは、全国規模での大学生の交流の一端を示す事象としても興味深い。

(3) 学生チーム間の交流

アンケート調査では、回答した38チーム中24チームが「他のよさこい系大学生チームとの交流がある」と答えた。具体的な交流として、レクリエーションが10チーム、食事会が1チーム、オンライン座談会が8チーム、合同練習が15チーム、合宿が3チーム、共催のイベントが5チーム、その他に6件の回答が得られた。コロナ渦中の2021年秋に行った調査であることを鑑みると、平常時の交流活動はより多いものと考えられる。

もちろん、日常的なチーム間の交流だけでなく、全国から大学生を集めるYOSAKOIソーラン祭りやにっぽん真ん中祭りのような大規模イベントでは、他の大学生チームと直接会場等で交流が行われる。今回のアンケー

ト調査においても、各大学生チームは、複数のよさこい系イベントに参加したことがあると回答していた。最大で13件のよさこい系イベントに参加経験があるなどチームによる差はあるものの、計算上は各チーム平均で3.8件のよさこい系イベントへの参加経験がある。このように、複数の祭りに参加して演舞を披露し、そこに集う他の大学生チームや社会人チームと交流できる機会を持つことができるのは、自由度が高く全国各地各季節に類似のイベントが開催されているよさこい系イベントの特徴であり、大学生チームはその特徴を生かして交流活動を行っている。

また、チームの垣根を越えた学生個人の交流も多い。例えば、よさこいにかかわる学生有志が企画する、「全国学生よさこい交流会」がある。これはSNSで呼びかけられ、参加を希望した学生が全国各地から集まり、レクリエーションなどを楽しむイベントになっている。他チームへの限定参加というものもある。限定参加とは、自分のチームが参加しないよさこい系イベントに、一時的に他のチームのメンバーとして参加することである。限定参加はよさこい系イベントごとに、SNS等に窓口を設けて各チームが募集をする。限定参加を通して他のチームに一時的に加入することで、加入先のメンバーと交流ができるだけでなく、自チームとは違う演舞によって表現力などのスキルアップにもつながる。なお、これらの交流を通して得た人的なつながりは、それぞれの学生にとって就職活動や大学での学業に生かしたり、卒業後のキャリアに生かしたりすることが期待できるが、今回の調査ではその具体的内容までは捉えることができなかった。

4. よさこいを踊る大学生は「ヤンキー」か？

社会に広く定着した感のあるよさこい系イベントとそこで踊る大勢の若者たちに対しては、若者論の題材として、ネガティブな文脈で取り上げられることも少なくない（香山2002、三浦2008、難波2009）⁽¹⁰⁾。よさこい

系イベントが大学生によって支えられている以上、これらの若者論はよさこい系イベントに参加している大学生に対しても語っていることになる。これらに対しては、すでに内田による徹底的な批判（内田 2010）が出されており、またよさこい系イベントをめぐる若者論全体を論じるのは本稿の力量を超えるが、これら若者論の論者が批判者の内田を含めいずれもよさこい系イベントで踊っている若者自身、すなわち直接の当事者ではない⁽¹¹⁾ことを鑑みれば、よさこい系イベントで踊っている若者（宮崎）が筆頭著者となるこの小稿でも、少なくとも当事者としての大学生の立場からなら、何らかの有意義な発言ができるものと思う。

内田は、香山ら3者の若者論について「論調として極端にまとめると、下級階層が支える「よさこい」はナショナリストを生む基盤になりやすく、「ヤンキー」や右翼と親和性があるという」（内田 2010：30）と述べる。香山（2002）は、現代（21世紀初頭）の若者たちが、無意識にかつ軽やかに「愛国ごっこ」に興じていることから、容易にナショナリストに与する危惧があると指摘し、その具体例としてYOSAKOIソーラン祭りに参加する若者たちを取り上げている。次に三浦（2008）は、「低学歴・低収入の階層が担い手となり、地域社会が機能しなくなった（＝溶解した）代表的な表れの一つとして、「よさこい」を取り上げている」（内田 2010：36）。豊橋のイベント「ええじゃないか豊橋」に参加した若者へのインタビューから立論を行っている点も、本稿（愛知大学豊橋校舎に所属する2名が著者）の立場では注目される。さらに難波は、現代日本のヤンキー像として「階層的・文化的にロウアー」、「早熟・早婚・旧来型の性役割を所与のものとしている」、「地元（でまったり）志向」の三条件を示す何ものか（難波 2009：209）であるとし、さらに「「よさこい」＝「ヤンキー」という道筋」（内田 2010：40）を示す。

これら 2000 年代に相次いで出されたよさこい系イベントをめぐる若者

論には、興味深い視点や洞察が含まれていることは否定しない。集団演舞とナショナリズムの親和性はナチス・ドイツや戦前日本の歴史をみても明らかであるし、YOSAKOI ソーラン祭りの創設者長谷川岳がナショナリズムと親和性の高い政党（自由民主党）所属の国会議員として活動（2010年初当選）していることも踏まえ、これらのイベントの持つ政治性や政治的な利用は検討されるべき論点である。また、よさこい系イベントへの参加者の中に、三浦が「低学歴・低収入」とみなす階層が一定数含まれていたり、難波が「ヤンキー」とみなす若者が一定数参加していたりすることも、イベントの全国的な規模の大きさから考えれば事実であろう。

しかし、本稿の限られた大学生対象のデータからであっても、これらの若者論への反駁は容易である。例えば、YOSAKOI ソーラン祭り自体、北海道大学の学生を中心に企業や社会人の協力を得て創始されたイベントで、これを「低学歴」や「階層的・文化的にロウアー」、「ヤンキー」と結びつけるのは無理筋だろう。また、多くのよさこい系イベントは大学生演舞チームと大学生による学生実行委員会で支えられているが、彼ら彼女らを「低学歴」と断ずることは社会通念上不可能である。また、大学生が「低収入」であることは否定しないが、それは大学生という身分上当然であり、ことさらによさこい系イベントに参加する若者の低収入性を指摘するのなら、「よさこい系イベントで踊った大学生は他の学生に比べて卒業後低収入になる」ことを実証しなければならないだろう。三浦の巻末（三浦2008：161-163）には、「坂戸よさこい、ええじゃないか豊橋インタビューの調査概要」として、聞き取り対象となった若者51名の一覧表が掲載されているが、そこでの大学生のサンプルは2名であり、到底大学生を代表するものとはいえない。また、これとは別に2007年10月に「ええじゃないか豊橋」の場でインタビューしたという大学生（22歳女性）も登場する（三浦2008：174-176。なお、一覧表に掲載されていない理由は不明）が、卒

業後もよさこいを続けると明言する彼女は、すでに内定が出ているのか「銀行員になる。踊るために土日休みのところを探して就職した」と述べている。彼女は数年後には、「よさこいを踊る大卒の銀行員」という、三浦の下層社会論とは対極に位置する存在になるのだが、そのことへの三浦の言及はない。

それにしても、大学生の十分なサンプル抜きによさこい系イベントを巡る若者論を語ること自体無理だと考えられるが、三浦はわざわざ大学生チームの参加が少ないイベントを選んで聞き取りを行ったのだろうか。あるいは大学生でなさそうな若者を恣意的に選んで聞き取りをしたのだろうか。YOSAKOI ソーラン祭りやにつぼんど真ん中祭りのような大学生チームの参加が多いイベントを避け、「いかにも地元のヤンキーが集まっているようなイベント（だと三浦がみなすもの）」を訪れ、中高生や専門学校生を選んで聞き取りを行えば、必然的に「低学歴の若者」のサンプルが集まることになるが、そこから有意義な若者論が引き出せるのかは疑問である。

本研究のアンケートでは大学生チームの演舞（2021年度）に込められたテーマ・思いを尋ねた。全国の大学生がよさこい系イベントでの演舞に込めた思いが率直に示されているので、以下、得られた回答を列記する。「踊り子の思いをのせ、一心不乱に舞い踊る姿を通して見てくださる人に元気と笑顔を届けたい」（北海道の学生チーム）。「『生きる』自分たちらしいがむしゃらさや、演舞に対する真っ直ぐな思い、このコロナ禍の約2年間の生きた証、その全ての思い」（北海道の学生チーム）。「今までの活動を通して私たち自身が感じた鼓動」（青森県の学生チーム）。「今を生きる」（福島県の学生チーム）。「絆、幸」（茨城県の学生チーム）。「夜明けの太陽、曙光と類義語で希望の光、物事の最初の明るい兆しという意味も持ち、コロナの影響で暗闇にいるみたいな状況だけど、この演舞が希望の光になって欲しい、10代目で一区切りして、11代目として新たな一歩を踏み出す

中で明るい兆しになるような演舞にしたい」（東京都の学生チーム）。「田舎から夢を追いかけて上京してきた人の物語」（東京都の大学生チーム）。「人と人との繋がりや強さを、紐の結び方に表した。最初は解けやすい片結びのような関係性から、困難を乗り越え分かち合いあやつなぎになる様子を表現している」（東京都の大学生チーム）。「嫌われたくない」という感情。および、それに捉われず自分らしく生きる様」（東京都の大学生チーム）。「様々な妖怪、動物が集まり宴をする様に様々な県、学部の違ったメンバー達が一つの集団として楽しむ」（神奈川県の子生チーム）。「無病息災、人々の祈り、再び皆が元気に集う」（長野県の子生チーム）。「一体」（岐阜県の子生チーム）。「皆晴」（愛知県の学生チーム）。「進歩」（愛知県の学生チーム）。「祭りの楽しさ」（三重県の学生チーム）。「再興」（京都府の子生チーム）。「自分だけの夢を見つける自分の波に乗れ！」（大阪府の子生チーム）。「今を超えろ」（大阪府の子生チーム）。「コロナが終息することを禱り、笑輝が20年続いてきたことの誇りと感謝」（岡山県の子生チーム）。「サキバレ」が魔法となり、見てくださるお客様の心が晴れるよう」（山口県の子生チーム）。「個性を彩り虹となる。昨年の悔しい思いも胸に」（香川県の学生チーム）。「チーム内での関係と今後の発展を明るいものにしたい」（長崎県の学生チーム）。「冒険」（長崎県の学生チーム）。

これら学生たちが演舞に込めた思いの数々からは、果たして香山がYOSAKOIソーラン祭りで踊る「若者たちは、「何かおもしろいことが起こらないか」と暴走族を見に行く期待族となる人たちと本質的には変わらないのかもしれない」（香山2002：147）と述べるような無気力な受け身の姿勢や安っぽいナショナリズム、あるいは三浦や難波の指摘する低学歴臭、ヤンキー臭が感じられるだろうか。素直に彼らの回答を読むのなら、そこに見えるのは、煩悶しつつも自分なりの夢や希望を持ち、懸命に仲間たちとともに自分たちの踊りをつくりあげ、自己表現・自己実現を果たそうと

青春の日々を過ごす、等身大の若者の姿ではないだろうか。

また、よさこい系イベントと「ヤンキー」の関係を考える上では、アンケート調査で大阪府の大学生チームが回答した2021年度の演舞の題材が「大阪ヤンキー」であることが興味深い。このような題材が選ばれたことから、よさこい系イベントと「ヤンキー」に親和性があり、かつ世間から多分にそのように思われていることを踊る側も自覚していることがうかがえる。それと同時に、あえてヤンキーを前面に出しているのは、彼ら大学生が「自分たちはヤンキーではない」こともまた自覚しているためといえよう（生粋の「ヤンキー」ならあえて演舞のテーマとして強調しなくてもヤンキーらしさが出るはず）。実際にこの大学生チームが所属する大学は受験偏差値も高い国立大学で、毎年多くの教員を輩出しており、難波がヤンキーの特徴として挙げた「階層的・文化的にロウアー」とはむしろ対極にある。卒業後は教育現場で「大阪ヤンキー」を指導する側になることが期待される立場の学生があえてヤンキーを題材によさこい系の演舞を聴衆の前で披露していることには、「ヤンキー性」をも見世物として包摂するよさこい系イベントの奥深さすら感じる。題材に込められたテーマも「自分だけの夢を見つけろ自分の波に乗れ！」（アンケート調査による）と、中学校の熱血教師が生徒に語るようなもので、個人の確立に基づく自己実現への希求が感じられ、香山の危惧するナショナリズムへの同一化傾向は感じ取りにくい。もちろん、難波の述べるヤンキーの特徴「地元（でまったり）志向」や三浦の「低学歴・低収入」との結びつきも感じられない。限られたアンケートの事例のみで断じるのは控えるが、少なくとも参加する大学生チームひとつとっても、よさこい系イベントと踊り手の関係は、ナショナリズムや下層社会論、ヤンキー論等でひとくくりにはできるほど単純なものではないことは確かである。

もちろん、よさこい系イベントに参加する若者を論じた若者論には興味

深い論点も含まれることは筆者も認める。また、このような観点で若者論が語られること自体は、よさこい系イベントと参加する若者たちの姿が社会の関心を集めている証拠であり歓迎したい。そこで、よさこい系イベントを題材にした今後の若者論においては、是非とも学生はじめ若者たちの生の声を集めた実証的データをもとに立論の組み立てがなされることを求めたい。大学生の卒業研究でもこの程度の実証的なデータを集めることができるのであるから、専門研究者ならなおさらであろうし、またデータをもとにすることでより立論の説得力も増すものと思う。

IV おわりに

本研究では、よさこい系イベントに参加する全国の大学生チームとそこに所属する大学生を対象に、その実態を主に次の点において明らかにしようとしてきた。すなわち、全国で現在どの程度のよさこい系大学サークル・チームが存在し、どの程度の大学生がそこに所属しているのか。彼ら彼女らは、どのような契機でよさこいチームに所属し、踊るようになったのか。どの大学のチームがどこのどのようなよさこい系イベントに参加しているのか。どこの大学のどのようなチームが、具体的にどのような演舞を行っているのか、またそこに何らかの地域的な特徴は見られるのか。全国の大学生ならびにチーム・サークル間にどのような交流があるのか。大学で踊った彼ら彼女らは、卒業後もどのような形でよさこい系イベントや大学のよさこいチームと関係をもつのか。以下に結果を列記する。

新型コロナウイルス感染拡大直前の2019年において確認された大学生よさこいチームは142件で、ほぼ全国に分布していた。またアンケート調査においては平均で1チーム50名強の大学生が所属していたので、おおよそ全国で7千人から1万人程度の大学生が大学のよさこいチームに所属している計算になる。川竹が推定した全国の大学生よさこいチーム200か

ら300、よさこい系イベントに踊り手側で参加する学生は1万5千人から2万人という値（川竹2020：134）からはかなり少ないが、新型コロナウイルス感染症流行下での調査であること、そもそも調査で捉え切れていない大学生チームや大学生が相当数いることを鑑みると、本研究の方が絶対に正しい値であるとまではいえない。それでも、全国規模の実態調査として本稿の結果にも一定の価値はあるものと思う。

よさこい系の大学生チームの全国的な分布から、よさこい系イベントがすでに全国に広がり、それぞれ大学生が継続的にチームを組んで参加し続けるような定着したイベントになっていることがわかる。現在では、大学生チームが参加するイベントも、披露する演舞も多様性が見られ、「鳴子を持ち、よさこい鳴子踊りの楽曲に乗せて、隊列を組む」元来のよさこい祭り式の演舞（高知型）を墨守する大学生チームは少数派になっている。鳴子自体を持たないチームも多数存在するが、その場合でも自身を「よさこいチーム」であるとの自己認識を捨ててはいない。参加するイベントも多様で、3大イベントというべき高知のよさこい祭り、札幌のYOSAKOIソーラン祭り、名古屋のにつぼんど真ん中祭りに参加するチームはそれぞれ15チーム、41チーム、46チームと、合わせても全体の3分の2程度である。それぞれのチームは複数のよさこい系イベントに参加したり、自主的な他大学チームとの交流イベントを設けたりと活発な交流を行っているが、その交流の空間スケールは、地方レベル、広くても西日本・東日本レベルにとどまる。

これまでの地理学では、内田の一連の研究によってよさこい系イベントが上演される空間のありよう、担い手となる社会集団と祝祭空間を通した地域とイベントの相互関係について解明が進められてきた。よさこいに限らず様々なイベントの上演が行われる「場」についての議論も神谷ほか（2017）等で蓄積されている。本稿では、これら「上演の場」や「祝祭空間

と社会集団」よりもより広範囲の地理的事象である、演者の全国的な分布や上演内容の地域性、広範な交流関係について、大学生よさこいチームという限定的な集団ではあるが、一定程度の論及ができたものと考えている。

ただし、本研究では、目的に列記した実態把握の論点のうち、明らかにするに至らなかったものも多い。よさこい系イベントに参加している個々の大学生が、どのような経緯でよさこいを踊るようになったのか、卒業後どのような形でよさこい系イベントや大学生チームと関係を持つのかについては、ほぼ言及することができなかった。その他の論点についても、アンケート調査の回収率の問題等で、全国の実態を十分に明らかにしたとまではいえない。コロナ禍中という一種異常な状況下での調査であることも鑑みて結果にも一定の留保が必要であろう。これらの限界は、事実上初めて行う研究作業である上に決められた年度で調査と論文をまとめなければならないという大学生の卒業研究の性質からやむを得ないことであり、今後のさらなる研究蓄積に期待するよりない。しかし、(最終的な論文化にあたっては指導教員の力を仰いだが)地方の一大学の大学生であってもよさこい系イベントとそこに参加する大学生に関して、この程度の卒業研究を上梓できたという事実を鑑みれば、今後さらなる研究が報告され、これらの残された論点が明らかにされていく見込みは十分にある。

ところで、よさこい系イベントの創設や普及において、大学生の果たした役割は極めて大きい。大学生の本分はよさこいの演舞ではなく学業であることはいままでのない。ならば、これまで専門研究者が主導してきた「よさこいの研究」にも、大学生が大きな役割を果たすことはできるのではないか。1万人程度いると考えられる全国のよさこい系チームに所属する大学生も、多くが卒業研究を行うだろう。彼ら彼女らの中から、よさこい系イベントでの経験やその中で培ったネットワーク等を活用し、かつて先輩たちがよさこい系イベント自体を開拓していったように、よさこい系イベントを

対象にした研究を開拓していく者が何十人何百人と出てきたら、よさこい系イベントの研究は現在よりはるかに進展する。そしてそれには、先達というべき学生が卒論としてまとめた先行研究が公刊論文の形で参照できるに越したことはない。本稿の公刊が、これからよさこい系イベントを対象に研究をしようとする学生の参考となり、多少なりとも背中を押すことができる役割を果たせるものになることを、願っている。

謝辞

本稿は、2021年12月に宮崎恵が愛知大学文学部に提出した卒業論文「大学生よさこいチームの演舞にみる地域性」に、指導教員の一人であった近藤暁夫が全面的な改稿を加えたものです。宮崎の卒業論文の骨子は、2022年3月の日本地理教育学会全国地理学専攻学生卒業論文発表大会で報告しました。宮崎の卒業論文をまとめるにあたっては、次の皆さまに大変お世話になりました。愛知大学の岡本耕平先生には、宮崎の指導教員として懇切丁寧なご指導をいただきました。全国の大学生よさこいチームの皆さまには、アンケート調査にご協力いただきました。2021年度の愛知大学文学部地理学ゼミの皆さまには、宮崎の同級生として、卒業論文作成の各段階において助言や励ましを頂戴しました。末筆ながら、厚く感謝申し上げます。

注

- (1) 矢島(2002)は、よさこい系祭りについて「原則として鳴子を持ち、地元の民謡などを取り入れて踊る祭り」との定義づけを行っている。ただし、これも「原則」「民謡などを取り入れ」とかなり幅を持たせた定義である。研究対象とする以上は、一定の定義づけは必要だが、よさこい系祭り・よさこい系イベントについては、厳格な定義というよりも、一定の幅を持った捉え方をする方が、実態を把握しやすいといえるだろう。

- (2) よさこい系イベントに関する全国組織が存在しないわけではないが、規模は小さい。2013年には「YOSAKOI JAPAN 全国連絡協議会」が設立されたが、2023年現在加盟しているよさこい系のイベントは17件に留まっており、高知のよさこい祭りや名古屋のにつぼんど真ん中祭りは参加していない。組織的な統合の難しさがうかがえる。
- (3) につぼんど真ん中祭り公式サイトより。
- (4) 筆者の一人宮崎の聞き取りや経験による。
- (5) 筆者の一人宮崎の聞き取りや経験による。
- (6) につぼんど真ん中祭りのことである。地元や関係者の間では略して「どまつり」と呼ばれることも多い。
- (7) アンケート調査で回答を得られた「京炎そでふれ!」に属する3チームの演舞のモチーフは、それぞれ「鞍馬天狗」「祇園祭」「源氏物語」と、京都の歴史性を強調するものであった。
- (8) アンケート調査による。
- (9) なお、ここでのチームの演舞類型には SNS 等で動画の形で公開している演舞から類型化したものもあり、SNS 上で「どまつり・その他型」の演舞を披露している大学生チームが、YOSAKOI ソーラン祭りではルールに合わせてソーラン節を組み込んだ踊りや鳴子を持った踊りを披露している可能性は否定しない。
- (10) なお、三浦(2008)に一部加筆修正して文庫化したのが三浦(2010)だが、「よさこいを踊る若者」についての記述はほぼ同一である。
- (11) 内田(2010)は、香山・三浦・難波らの若者論を、よさこい系イベントに長年実際に参加している立場から、いずれも実態を踏まえた立論でないことを厳しく指摘している。ただし、内田自身もよさこい系イベントに出会ったのは高知大学に助教として赴任してからのことであり、学生として参加した経験はない。

参考文献

- 内田忠賢(1992). 都市と祭り—高知「よさこい祭り」へのアプローチ(1)—, 高知大学教育学部研究報告 2-45, 1-15.
- 内田忠賢(1994). 地域イベントの社会と空間—高知「よさこい祭り」へのアプローチ(2)—, 高知大学教育学部研究報告 2-47, 1-14.
- 内田忠賢(2009). 都市祝祭の変貌—よさこい系イベントの展開—, 鈴木正崇編『東アジアの民衆文化と祝祭空間』慶應義塾大学東アジア研究所, 67-89.

- 内田忠賢 (2010). 「よさこい」をめぐる若者論の現在. 谷口貢・鈴木明子編『民俗文化の探究』岩田書院, 29-44.
- 内田忠賢(2015). 現代祝祭のグローバルな展開—YOSAKOI-SORAN ブラジル大会—, 奈良女子大学地理学・地域環境学研究報告 8, 121-128.
- 内田忠賢 (2019). 都市祝祭の現在—よさこい系祭りの競技化—, 奈良女子大学文学部研究教育年報 16, 7-14.
- 神谷浩夫ほか編 (2017). 『ライブパフォーマンスと地域—伝統・芸術・大衆文化—』ナカニシヤ出版.
- 香山リカ (2002). 『ぶちナショナリズム症候群—若者たちのニッポン主義—』中央公論新社.
- 川竹大輔 (2020). 『よさこいは、なぜ全国に広がったのか—日本最大の交流する祭り—』リーブル出版.
- 難波功士 (2009). 『ヤンキー進化論—不良文化はなぜ強い—』光文社.
- 三浦展 (2008). 『日本溶解論—この国の若者たち—』プレジデント社.
- 三浦展 (2010). 『ニッポン若者論—よさこい、キャバクラ、地元志向—』筑摩書房.
- 森雅人 (1999). たった一人が仕掛けた祭り—札幌「YOSAKOI ソーラン祭り」—. 都市問題 90-8, 39-51.
- 矢島妙子 (2002). 札幌市北区新琴似の生活文化の創造過程—「YOSAKOI ソーラン祭り」の地域密着型参加集団の歴史・社会背景—, 生活学論叢 7, 3-16.
- 矢島妙子 (2015). 『「よさこい系」祭りの都市民俗学』岩田書院.
- うらじゃ公式サイト (<https://uraja.jp/>). 2023年12月20日最終閲覧.
- 京都学生祭典公式サイト (<https://www.kyoto-gakuseisaiten.com/>). 2023年12月20日最終閲覧.
- につぼんど真ん中祭り公式サイト (<https://www.domatsuri.com/index.html>). 2023年12月20日最終閲覧.
- YOSAKOIJAPAN 全国連絡協議会公式サイト (<https://www.yosakojapan.com/>). 2023年12月20日最終閲覧.